

夏目漱石

文芸とヒロイック

文芸とヒロイック

自然主義という言葉とヒロイックという言葉は仙台平せんだいひらの袴はかまと唐棧とうげんの前掛まえかけのように懸け離れたものである。したがって自然主義を口にする人はヒロイックを描かかない。実際そんな形容のつく行為は二十世紀にはないはずだと頭から極きめてかゝっている。もっともである。けれども実際世の中こっけいにないまたは少すくないという事実と、馬鹿ばかげている、滑稽こっけいであるという事実とは違ちがうべきはずである。吾々の見渡した世間にそう眼につくほど

ごろくくしていい物のうちには、常人さえ唾棄^{だき}して顧みなくなつた（したがって存在の権利を失つた）のもたぐさんあるだろうが、貴重なため容易に手に入りかねるのもずいぶんあるべきわけである。ヒロイックは後者に属すべきものと思う。

自然派の人がめつたにないからという理由でヒロイックを描かないのは当を得ている。しかし滅多にないからという言辞のもとにヒロイックを軽蔑^{けいべつ}するのは論理の昏^{こん}乱^{らん}である。この派の人々は現実を描くと言う。そうして現実暴露の悲哀を感ずると言う。客観の真相に着して主

観の苦悶くもんを覚ゆるといふ。いちいち賛成である。けれど
 もこの苦悶は意のごとくならざる事相じそうに即し、思いの
 まゝに行かぬ現象の推移に即し、もしくははかくあれかし、
 かくありたしとの希望を容れぬ自然の器械的なる進行に
 即して起る矛盾むじゆんかんかく扞格の意にほかならぬ。言い換れば客
 観の世界が主観の世界と一致をかくがためである。現実
 が吾れわに伴ともなわざるの恨みである。また言い換えればわ
 が理想がわが頭の中に孤立して、世態とあまりに没交渉
 なるがためである。冷刻なる自然がわが知識と情操と意
 志を侮蔑ぶべつしてかつてに横着おうちやくに非人間的に社会を動かす

て行くからである。

自然主義者のいわゆる主観の苦悶をかく解釈するとき、理想の二字を彼等の主観中より取去るとりさことは困難とならねばならぬ。広義における理想を抱かいだざるものが、自己または他人の経過した現実を顧みて、これを悲しむの必要もなければこれに悶もだゆるの理由もないはずである。

ひとたびこの論断を肯うけがったとき、彼等は彼等の主観のうち、また彼等の理想のうち、彼等の平素排斥しつつあるがごとく見ゆる諸々もろもろの善、諸々の美、また

もろくの壮と烈との存在を肯わねばならぬ。したがってヒロイックは彼等の主張せんと欲して、現実に見出しがたきがために、これを描くを憚り、もしくはこれを描くを恐るる一種の行為と言わねばならぬ。

彼等にしてもし現実中にこの行為を見出し得たるとき、彼等の憚りも彼等の恐れも一掃にして拭い去を得べきである。いわんや彼等の輕蔑をや虚偽呼わりをやである。余は近時潜航艇中に死せる佐久間艇長の遺書を読んで、このヒロイックなる文字の、我等と時を同くする日本の軍人によつて、器械的の社会の中に赫として一

時に燃焼せられたるを喜ぶものである。自然派の諸君子に、この文字の、今日の日本においてなお真個の生命あるを事実のうえにおいて証拠立て得たるを賀するものである。彼等の脳中よりヒロイツクを描くことの憚りと恐れとを取り去って、随意にこの方面に手を着けしむるの保証と安心とを与え得たるを慶するものである。

往時英国の潜航艇に同様不幸のことがあつた時、艇員は争つて死を免のがかれんとするの一念から、一ひとつ所にかたまって水明りの洩もれる窓の下に折り重なつたまゝ死んでいたという。本能のいかに義務心より強いかを証明する

に足るべき有力な出来事できごとである。本能の權威のみを説かんとする自然派の小説家はこゝに好個の材料を見出すであらう。そうしてある手腕家によつて、この一事實から傑出した文学を作り上あげることができらるう。けれども現実うそはこれだけである。その他は嘘うそであると主張する自然派の作家は、一方において佐久間艇長とその部下の死と、艇長の遺書を見る必要がある。そうして重荷おもを担になうて遠きを行く獣類と選ぶところなき現代的の人間にも、またこの種不可思議の行為があるということを知る必要がある。自然派の作物は狭い文壇の中にさえ通用すれば

差支さしつかえないという自殺的態度を取らぬ限りは、彼等といえどもまた自然派のみに専領されていない広い世界を知らなければならぬ。

病院生活をして約一か月になる。人から佐久間艇長の遺書の濡ぬれたのをそのまま、写真版にしたのを貰って、床の上でその名文を読み返してみても、「文芸とヒロイック」という一篇が書きたくなかった。

(明治四三・七・一九)

日本文学電子図書館

文芸とヒロイック

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第7巻」角川書店
昭和42年 6月30日 6版発行

日本文学電子図書館